

「金沢21世紀美術館」を視察して

岩国市議会議員 渡 吉弘

1 はじめに

いま、地方自治体が経営している「箱もの」所謂「施設」が厳しい状況に置かれている。



そのような状況の中、ここ岩国市でも「宇野千代記念館の建設構想」や「錦帯橋資料館構想」が相次いで暗礁に乗り上げた。「そのような大金をつぎ込んで元は取れない」「なぜこのような時期に…」というのが大きな理由である。

今年の春、NHKの「クローズアップ現代」で『どうなる わが町の美術館』というテーマで、

苦しい状況におかれた公立美術館の「冬の時代」の現状がレポートされた。

そこで、「旭山動物園」と共に「全国の公立勝ち組施設」として並び称される「金沢 21 世紀美術館」を訪れ、総務課長補佐の西川さんから立ち上げから現在までの苦労話や人気の秘密についてたっぷりとお話を伺ってきた。以下がその報告である。

2 金沢市の概要について

15 世紀後半から 16 世紀末、蓮如上人の北陸布教で勢力を強めた農民中心の一向宗の信者が、加賀の守護であった富樫政親を滅ぼした。その後、金沢のまちづくりは浄土真宗の本願寺の末寺「金沢御坊」の周辺に後町、南町などの町がつくられたことから始まったと言われている。

そして天正 8 年（1580 年）柴田勝家の甥、佐久間盛政により金沢御坊は攻め滅ぼされ、盛政はここに「金沢城」を築いた。しかし、天正 11 年（1583 年）盛政が賤ヶ岳で敗れ戦死した後、七尾小丸山城にいた前田利家が金沢城に入城。その時以来、加賀・能登・越中を合わせた「加賀百万石」の城下町として繁栄を続けることになった。

明治 4 年（1871 年）廃藩置県後、金沢町となり、同 22 年 4 月 1 日市制が施行され、石川県の県庁所在地として、政治・文化・経済の中心として発展を続けた。そして、大正 13 年以來 10 数回にわたる隣接町村との合併を経て、市街地規模の拡大を図り、平成 8 年 4 月 1 日に中核都市となった。

金沢市は、幸運にも長い間大きな災害にも遭わず、和菓子・加賀友禅・金箔・九谷焼など歴史的伝統文化と美しい自然環境を維持している素敵な街である。香林坊、武蔵ヶ辻という商業地を拠点に、駅周辺地区の再開発や駅西副都心づくりも活発に行なっている。

また、金沢大学の移転に伴って、環状道路など基盤整備も進み、金沢の個性ともいえる学術・文化・伝統環境などを磨き、高めながら、小さくても世界の中で独特の輝きを放つ「世界都市・金沢」の形成を目指している。（参考：金沢市のは面積 467.77 平方キロ、人口 約 44 万 1000 人、世帯数約 17 万 5000 世帯）



3 金沢21世紀美術館について



ご承知のように、昨年 10 月に開館したこの「金沢 21 世紀美術館」の建物は、設計「妹島和世 + 西沢立衛/SANAA」によるもので、ヴェネツィア・ヴィエンナーレ国際建築展で「金獅子賞」を獲得した名建築である。

美術館のコンセプトは『まちに開かれた公園のような美術館』。金沢市の中心部に位置し、誰もが気軽に、楽しく、ぶらっと立ち寄ることができる公園のような美術館である。そのコンセプトを「建築」という形で表わした結果が、白亜の丸い建築となったのであろう。三方を道路に囲まれた美術館へは、色々なアプローチができ、全面ガラス張りの外壁が「開かれた美術館」を見事に演出している。

兼六園側の本多通り(東口)から中に入ると、右手にレストランとデザインギャラリー、左手には展示室といわれる「有料ゾーン」の受付とレクチャーホールが存在する。中も透明なガラスで仕切られ、とても開放感がある。

美術館の内部は大きく「有料ゾーン」と「無料ゾーン」の二つの空間に分かれている。普通の美術館にある「常設展示」がここではコミッションワークと呼ばれる無料ゾーンである。チケットを買って入場する有料ゾーンも境界が透明なガラスであるため、廊下から垣間見ることが出来る。この美術館の面白いところであり、「売り」ともいえる。

小さな部屋が多く、通路も沢山あり入り組んでいる。一瞬迷子になりそうだが、これもまたこの楽しみの一つである。(案内板が多すぎて撤去されたそうである。 - 子ども達の冒険心も満たしているのか...。)



全面ガラス張りのくつろぎ空間

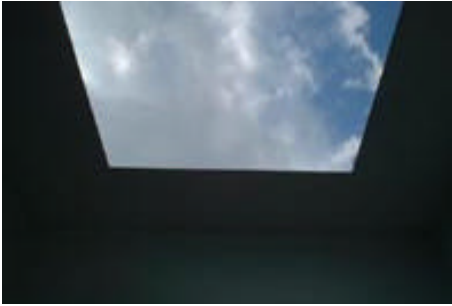
また、ソファや椅子が至る所に置かれ、思い思いに休憩できる環境が整っている。いつでも外を眺められ、のんびりと散策できるところが素晴らしい。

ガラス以外の壁面はすべて白。妹島和世 + 西沢立衛が共同設計を始め設立した SANAA。SANAA の作品は、「SANAA White」といわれる特別な雰囲気を持っていて、時空を超えたジャンルを横断する「アート」に直接に触れ、体感し、伝統的な街・金沢から未来の創造への橋渡しをするにはもってこいの建物である。

そして、円形の建物内のガラスに沿って「無料ゾーン」が存在する。そこには「コミッションワーク」と呼ばれる作品がある。屋根のない「光庭」には、レアンドロの「スイミングプール」があり、光の演出とコミュニケーションをテーマに、不思議な空間を演出している。



また、タレルの「ブルーネットスカイ 2004」は、天井部分がぼっかりと空いた部屋。回りに木製のベンチがしつらえてあり、のんびり、まったりと



タレルの「ブルーネットスカイ2004」

した時間が遅れるような癒しの空間を作っている。訪れた人は、きっと「空の移ろい」を体験でき、静寂と光の世界へ誘われる気分を味わえるであろう。

カプーアは、傾斜した斜面にぽっかりと現れたブラックホールを創造し、人を不思議な感覚で包み込み込んでいる。極め付きはマイケル・リン。鮮やかな壁面画とロッキングチェアは、歩き廻って疲れた私の身体を癒し、元気づけてくれた。

ざっと紹介させて頂いたが、この「金沢 21 世紀の美術館」は、教育、創造、エンターテインメント、コミュニケーションの場など、新たな「まちの広場」としての役割を期待され、同時に未来の文化を創り出す子ども達にとっても「開かれた教室」として最適の環境を提供しているのである。

古くからの伝統に守られながら、それでいて時代を超えて成長している子ども達にとって、この美術館が彼等に何をもたらすであろうか？興味を沸いてくる施設である。



4 建設の経緯について

この「金沢 21 世紀美術館」の建設には約 10 年間の長きに渡る構想があった。平成 6 年(1994 年)「石川県新県庁舎整備並びに跡地利用構想懇話会」が提言を行い、翌平成 7 年(1995 年)石川県と金沢市共同で都心地区整備構想検討委員会を設置した。更に平成 8 年(1996 年)9 月に「美術館等構想懇話会」が発足し、11 月には美術館等構想市民フォーラムが開催された。

そして、平成 14 年(2002 年)2 月「第 1 回金沢 21 世紀美術館運営委員会準備会」が立ち上がり、4 月にいよいよ金沢 21 世紀美術館の起工式がおこなわれた。平成 16 年(2004 年)3 月に金沢 21 世紀美術館条例が公布され、4 月には館長として蓑豊氏が正式に就任され、10 月 9 日「金沢 21 世紀美術館」が金沢大付属小・中学校跡地に開館した。

総工費約 113 億円をかけて金沢市が建設したこの美術館は、地上 2 階、地下 2 階で、直径約 113 メートルの円形の建物。地下 2 階はゆったりとした駐車場になっており、向いの市役所の駐車場に続いている。



東口入ってすぐ正面の「光庭」

館内の壁は全面白色で、外周は総ガラス張り。設計を担当された「妹島和世 + 西沢立衛」両氏によると、「都市と繋がっているような開放感を演出したかった。」ということだそう。美術館の建築自体が「現代アート」と呼ぶにふさわしい作品のようであり、建築や設計業界の注目も集めているようなので、今後は業界の視察も増えそうな気配である。

5 金沢21世紀美術館の人気の秘密について



上でも述べたが、全国の公立美術館が「冬の時代」と言われて久しい中、この美術館だけは「快進撃」を続けている。開館当初、年間 30 万人の入館者を予定していたが、2 か月で年間入場者目標数の 30 万人を突破した。

金沢市の中心部、兼六園の目と鼻の先に建設された美術館は、現代美術との「出会い」を演出するにふさわしく外観を持ち、所蔵・展示される作品も国内外の現代アートを中心に 250 点余り。1980 年代以降の「新しい価値観を提案する」作品が中心、そして著名な設計者と斬新なアイデアを取り入れた展示方法などなど…。

先月、上野動物園を抜き「入場者数日本一」の栄冠を獲得した、旭川市の「旭山動物園」を訪れ、展示の工夫（行動展示）の成功で入場者数を伸ばしたという「人気の秘密」をうかがった。それ以外にも、「秘密」や「仕掛け」が必ずあるはず。

岩国市議会事務局に無理をお願いし、「説明要員」の方を指名（西川氏）してまでお話をうかがってきた「人気の秘密」をここで報告するとしてしよう。

私はまず、「巨費を投じてのプロジェクトに議会や市民の反対はなかったか？」また、九谷焼や加賀友禅など「伝統工芸」の街・金沢で、「なぜ現代美術館なの？」とお尋ねした。

西川さんは「議会の反対は特にありません。文化・芸術に理解がありますから。」「いま伝統工芸と言われているものも、その時代は『現代アート』だったはず。」と笑ってお答えになった。うかがった「人気の秘密」をまとめてみた。

「構想から 10 年、じっくり時間をかけてきた」こと

建設の経緯で述べたように、1995 年の金沢大付属小・中学校移転し、美術館建設構想が持ち上がったときから、専門家と市民とで繰り返し論議し、「開かれた美術館」にするために準備を進めた。そして、その論議の内容を市民に「情報公開」したことである。

バブルもはじけ、自治体のどこも財政事情が悪化し、公的施設の建設には厳しい目が向けられていた。約 113 億円をかけた美術館にも、準備段階から「なぜ伝統の街・金沢に現代アートなのか。税金の無駄遣い。」と、叩かれたという。さらには「ここがダメだったら、日本の公立美術館は 30 年はダメだろう。」とも言われたという。

そこを乗り越えて成功を収めたのは、構想に時間をかけ、明確なコンセプトと情報公開にあったといえよう。

プレ・イベントの開催

平成 16 年(2004 年)4 月には館長として就任された みのゆたか 蓑 豊さん（現在、金沢市の第 2 助役でもある）は、北米の美術館で 26 年間勤務経験があった。また、「普段着で来られる美術館をつくりたい」「美術館は生活の一部でなければならない」という考えの持ち主でもあった。

そこに目を付けたのが観光客減少に悩む金沢市長。



作品が子ども達の遊び場でもある

早速袁氏を招聘し、このような画期的な素晴らしい美術館を作ろうとしたのである。(成功のもとには人事にもあった。)

袁館長や藤田準備事務局長さんは、「周囲の街と一体となる、地域に開かれた公園。そして街に賑わいを呼び込むような美術館」づくりのために、市内で講演会を頻繁に行なった。また、周囲の商店街との共同のイベントを行なったり、「経済効果」を説いて廻り、市民の間に「おらがまちの美術館」という意識を持たせ、支援の輪を広げていったのである。

「子どものための美術館」というイメージ戦略



袁館長らは、開館前に学校に収蔵作品を持ち込み「出前授業」「出前美術館」なるものを展開し、アートの楽しさを子ども達に知ってもらった。

また、このときの様子をマスコミが取材し、報道したため、市内外に知れわたるといふ「相乗効果」をもたらすことになった。(旭山動物園と同じマスコミ効果である。)

また開館後4か月かけ、市内の約95小中学校の生徒を全員招待する「ミュージアム・クルーズ」を実施した。

これは、子ども達が「現代アート」に直接向き合い、アートの楽しさに触れ、美術館が生活の一部となることで、感性を育む本物のファンになってもらうという、10年先を見越した芸術教育のきっかけを作ったといえそうである。

また、「まりびいととの遭遇」という、金沢市小・中学校&美術館連携特別プログラムの中に「もう一回券」と呼ばれる無料券を配布し、後で親と来てもらう「仕掛け」も作った。この結果約7000人が「もう一回券」を利用したという。子どもから美術館に連れて行ってくれと言われたら、親は断りにくいし、子供連れが気軽に利用でき、子供が行きたがる美術館は少ない。アイデアの勝利である。

「コミッションワーク」という見せ方

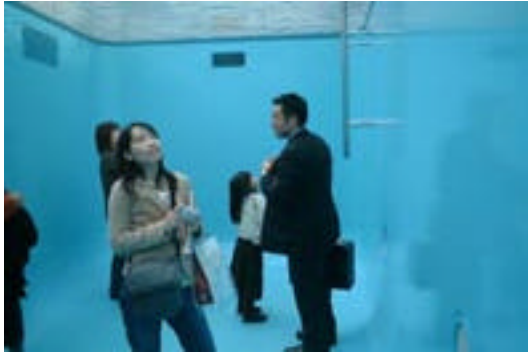
上でも書いたが、他の美術館では「常設展示」といわれる作品を、「無料ゾーン」に惜しげもなく展示している。そして、開放感あふれるスペースには図書館や保育施設、ショップ、カフェスペースまで設け、アミューズメント感覚を取り入れている。

ガラス越しに「有料ゾーン」が垣間見られる構造が「もっと見てみたい」という気持ちを起こさせ、有料展示ゾーンへ誘っているのかも知れない。面白い構造である。

6 今後の課題について

説明頂いた西川さんのお話では、「来場者が一巡した後、何度も来てくれるリピーターをどれだけ増やすか」というのが今後の課題だそう。市内の小・中学生約3万8000人を招き、芸術に親しんでもらったのも、彼等に今後リピーターとなって何度も足を運んでもらうためである。





市内から市外へ、そして全国的にいまの人気を定着させることへの挑戦がこれから始まるだろう。

また、もう一つ難しい「運営」についての課題も残ろう。平成 16 年～平成 17 年にかけての収入は事業収入や寄付金合計で約 7 億 8000 万。入場料収入だけでは運営は厳しいであろうし、約 113 億という莫大な初期投資が

今後運営費の予算不足を生むことも考えられる。

西川さんも、開館前から県内の企業を回り、サスティン会員（所謂サポーター）を募った。現在 78 社が協賛してくれているが、「来年はもっと少なくなるかも知れない、厳しい状況である。」という。

勿論、金沢 21 世紀美術館も「指定管理者制度」を導入し、民間へ委託し、経済性の観点からの運営を行なっている。全国の「公立の美術館」の抱える問題・課題は、こことて同じ。これからどのように克服していくか、これからも注目したい。

7 おわりに

「金沢 21 世紀美術館」のような施設を建設しようとするれば、議会や市民から「このようなものは必要ない。」「財政が苦しいときに…。時期尚早。」「教育や福祉にお金をかけるべき…」などと反対が必ず起こってくる。

しかし、都市計画や賑わい創出のためには、多様な試みが必要であり、観光客の落ち込みが始まった金沢には必要なものだったのかもしれない。

「なぜ金沢に現代アート？」ということもあるが、金沢のような古くから伝統のある、美意識の高い街だからこそ、似合うのかもしれない。

また、一般的には知られていない現代芸術家の作品を展示する「金沢 21 世紀美術館」の先端性が、かえって世界的な知名度を高めている。さらには金沢の街づくりや、10 年後、20 年後の芸術家を育てる意味においても大変素晴らしいことなのである。

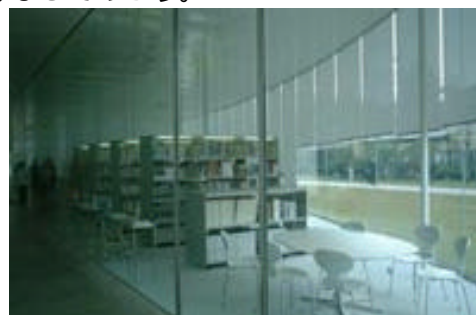
全国の美術館がいま「冬の時代」といわれるのは、建設される美術館のコンセプトが不明確であり、市民のための「物」という発想が少ないのが原因であろう。

金沢に行く前に立ち寄った芦屋市の美術館のように、一度経営危機に陥れば予算も削減され、活動も請願され、それによって魅力も薄れてくる。市は民間委託計画発表するが、もし引受先がなければ、休館を決定せざるを得なくなるであろう。

しかし、市民からは「経済性だけで美術館を閉鎖して良いのか？」「お金に換えられない価値こそ芸術」と、存続運動も起こってくる。

西川さんは「ここを訪れる割合は、県外の方が徐々にではあるが増えている。だからホテルや飲食店も相当潤っているんですが、数字が出てこないんですよ。」とおっしゃる。

観光の街・金沢で、観光で金沢を訪れ、美術館



図書館・保育園も併設してある



へ立ち寄りの方よりも、美術館や美術館の建物を見るために訪れる方が増えている不思議な現象が起こっている。

この美術館を見る市民の目が温かく感じられるのは、ここを訪れる方達が作り出す回遊性によってもたらされる「賑わい効果」や「経済効果」に、地元金沢の方達が気づき始めているのかもしれない。

敷地内にある、庭のきれいな「お茶室」 ある雑誌に紹介された美術館の記事は「10年、20年先を見据えて作られた、まさに『21世紀』の美術館。一番の成功の要因は、伝統を守ってきた金沢という街が、10年前から不確かな未来を信じ、そこに夢を託させたことだとは言いえないだろうか」と結ばれている。 いままさに、「託された夢」を見せて頂いたような気持ちである。「旭山動物園」も「金沢21世紀美術館」も、それに携った方達の見続けてきた夢を現実のものにするといった「不断の努力」にある。そしてその夢を理解し、温かく見守る「郷土愛」に満ちた市民がいる。と、いうことを学ばせて頂いた、大変貴重な視察であった。(2005.11.15)